

タイトル

『この番組へのご意見・ご感想は
#2ボイスで!』

美野哲郎

主な登場人物

上尾詩葉あげおうたは（26）声優

池宮歩人いけみやあゆと（26）声優・詩葉の元カレ

ヒロタス（34）『#2ボイス』放送作家

新井八千代（31）詩葉のマネージャー

森崎（50）『#2ボイス』ディレクター

西木戸（24）『#2ボイス』AD

樋口（25）歩人のマネージャー

山南（28）アニメ制作進行

如月りりか（17）女子高生声優

サラリーマン 声優番組ファン

女性声優 配信番組MC

スタッフA

スタッフB

スタッフC

○ビル・オフィス（夜）

一人残業のサラリーマン、夜食を食べべ
PCで女性声優の配信番組を視聴中。

女性声優（カメラに手を振って）「それで
は来週、また夢でお会いしましょう」

サラリーマン、手を振り返す。

時計、深夜23時間近。

CMの声「この後は新番組、若手声優・池宮^{いけみや}

歩人^{あゆと}と上尾詩葉^{あげおうたは}の『#2ボイス！（ハッ

シユタグ・トゥー・ボイス）』

既に興味なく、書類に目を落とす。

○配信サイト

『#2ボイス』番組ロゴの待機画面。

『#2ボイスで眩こう』のコピーが
添えられている。

23時を回り、タイトルコール。

池宮の声「池宮歩人とー？」

コール、そこで途切れる。

池宮の声「池宮歩人とー？…いやいやいや

ホラ早く、一生俺が名乗ってるから。池宮
歩人とー？ 上尾？ う、た？」

詩葉の声（淡々と）「上尾詩葉のー」

池宮の声「せーの、『#2ボ』……言っ
てよ、一緒に。俺言っちゃうよ？ ねえっ」

無音。やけになった池宮の叫び。

池宮の声「『#2ボイス』！」

明るいOP曲が流れ、画面切り替わる。

カメラに向かい、並んでブースに座る

池宮歩人（26）と上尾詩葉（26）。

満面の笑みの池宮と、だらけた詩葉。

池宮、テーブルをコンコン叩き、

池宮「上尾さん。あーげーおーさん？」

詩葉（すっとぼけて）「はい？」

池宮「台本」

詩葉、手元のペラをぞんざいに捲る。

池宮「笑顔」

詩葉、池宮に向け、力ない笑顔。

池宮（語気を強め）「カメラ見て」

二人、笑顔のままにらみ合い。

池宮「俺じゃなくてね？ カメラ」

詩葉、カメラを見ると台本を棒読み。

詩葉「いやーはじまってしまいましたねー」

池宮「始まってしまいましたねー」

詩葉「何そのテンション、歩人普段クール気取ってんのに。変なものでも食べた？」

池宮「カメラ回ってるから。わかる？ これ

ネットラジオ。動画付きストーリーミング放送。みんな見てますよ？」

詩葉「みんなって誰？」

池宮「……みんなはみんなでしょ。このっ」

池宮思わず声荒げ、待機画面に切替え。

『#2ボイスで眩こう』

○ビル・オフィス（夜）

サラリーマン、配信画面を見て唾然。

SNSに『#2ボイス』を打ち込む。

○芸術放送・スタジオ・副調整室（夜）

西木戸（24）、放送機器に手を掛け。

西木戸 「蓋絵に切り替え中」

T 『西木戸 AD』

森崎 (50)、腕組みして苦笑。

T 『森崎 ディレクター』

新井八千代 (31)、森崎に平謝り。

T 『新井 上尾詩葉 マネージャー』

樋口 (25)、胃を押えて見守る。

T 『樋口 池宮歩人 マネージャー』

西木戸 「ヒロタス、仕切り直して」

○ 同・同・ブース内 (夜)

詩葉と池宮の対面、撮影機材の死角に

座っているヒロタス (34)、苦笑。

T 『ヒロタス 放送作家』

池宮 「あの子。何したかわかってる？」

詩葉 「ホラ、私の職業って役者じゃないです

か。歌って踊るのが仕事な池宮くんはどう

か知らないですけどー」

池宮 「いつの時代からタイムスリップして来

た声優さんかなー。今更ジタバタしないで

下さいね。もう本番始まってから」

ブースから西木戸の指示。

西木戸「ねえヒロタス、やめさせて」

ヒロタス（手で制し）「いや……」

詩葉「私、役に関係ない話したり、役に余計なイメージ付くの嫌なんですよね」

池宮「アイドル役の時ラジオやってたじゃない楽しいに。歌と踊りのレッスンも一生懸命通ってたって。なんなら見た事あるよ」

詩葉「へえ、見た事あるんですね池宮さん、その時私のことどう思いました？」

池宮「は？ どうって……」

○同・同・副調整室（夜）

森崎「ラジオ、乗り気って聞いてたけど」

八千代「すいません、すいません。私の前では素直にやるって言うてくれたんです」

樋口「変わっちゃったな。上尾さん」

ヒロタス、西木戸にOKマーク。

西木戸「え？ このまま？」

西木戸の視線に、鷹揚に肯く森崎。

西木戸、困惑しつつブースに指示。

西木戸「あと15秒でスタジオ戻ります」

○同・同・ブース内（夜）

池宮「戻るってたってどうやって」

詩葉「池宮さん慌て過ぎ、ウケる」

ヒロタス（詩葉に）「言っておくけど」

詩葉「はい。なに？ ヒロタスさん」

ヒロタス「終わるよ？ 上尾詩葉」

詩葉「……」

西木戸の声「5、4、3……」

○配信サイト

画面に映る詩葉と池宮、作り笑顔。

池宮「ドタバタしてすみません。初回なので

緊張しちゃったのかな上尾さん。ね？」

詩葉「詩葉でいいよ？ 歩人」

池宮「（笑ってみせ）なんですか、その距離感
は」

詩葉「ざっくばらんにいこうぜー」

詩葉、池宮の背中を叩く。

詩葉「よいしょー」

池宮「……いい加減にしよ？」

○芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

池宮、カメラの死角で詩葉の足を軽く蹴飛ばす。詩葉、強めに蹴り返す。

池宮、笑顔で痛みに耐えて悶える。

ヒロタス、その様を少し面白そうに眺めつつ、池宮にカンペを見せる。

『歩人くんも呼び捨てでいこう』

池宮「は？ ヒロタスまで何言ってる」

次のカンペ『もっとケンカ』

池宮「いや……」

詩葉、カンペを見ると急に姿勢正し、

詩葉「じゃあ台本通り、ちゃんとしまーす」

ヒロタス、カンペを叩く。

詩葉（無視して）「『最近何か新しい挑戦はしましたか』だって。エピソードトークだ。

ホラ歩人、早くスべらない話しろよ」

池宮「なっ……」

池宮、怒りで癩癩起こし、身悶える。
ヒロタス、面白そうにその様眺める。

○同・同・副調整室（夜）

八千代「詩葉、真面目にやりなさい！」

森崎、スマホでSNSをチェック。

『#2ボイス』の書き込み。

『見てらんない』『今時こんな声優いる？』『誰この女、知らない』『なんで歩人くん呼び捨てにしたの？』

○芸術放送・外観（夜）

○同・スタジオ・副調整室（夜）

番組終えた詩葉、ブースを出て来る。
緊張して見守るスタッフ一同。

詩葉、森崎に頭を下げ、早口。

詩葉「ご迷惑おかけしました。至らぬ点多々

あったかと思えますが、本日はこれにて失礼いたします」

そのまま早足でスタジオを出る。

森崎（呆気に取られ）「お疲れ……」

八千代、森崎に頭を下げ、後を追う。

○同・同・ブース内（夜）

池宮、樋口に渡された水を呷り、

池宮「なんだアイツ。この番組続けるんですか。へタしたら上尾さんのキャリアにトドメ刺しますよ」

森崎「配信はそう赤字にならないから。枠もらえてる限り、1クールは続けたいね」

ヒロタス「炎上具合が楽しみだ、と」

ヒロタス、スマホでSNSを開く。

○芸術放送・表（夜）

局を出る詩葉。八千代が追いついてきて、背中で気配を感じ立ち止まる。

詩葉「はいはい自分でネットラジオやるって

言いました、私が悪かったですっ」

八千代「オーデイション全部落ちたから」

詩葉、シヨック受けて振り返る。

八千代「もう、仕事選べる立場じゃないの。

この番組だって社長のお情けで」

詩葉（自嘲）「じゃあ私、台無しにしちゃった

ね、最後のチャンス」

八千代「詩葉、もしかしてあなた……」

詩葉（遮り）「あーあっ、これでもう私の夢は

終わり。子役上がりの勘違い役者が、プラ

イドに飲まれて自滅しました」

八千代「……私はもうとっくに終わった事だ

って聞いてたから、それを信じたし共演N

Gも出さなかったけど」

詩葉「八千代さん。もういいから」

八千代「あなた……まだ彼のこと」

詩葉「好きじゃないですっ」

詩葉、氣迫で八千代を見据える。

詩葉「本当にやめて。もうイイ大人だよ。何

年も引きずってない。ありえないから」

八千代「そう……：そんなに」

詩葉「だから、ちゃんと話聞いてってば。もう終わった恋なの」

八千代「まだ好きなのね」

詩葉「え、言葉通じてます？」

八千代「ともかく。この先1クール三ヶ月、ラジオやりきってもらうからね。今だけは彼への気持ちを押えて」

詩葉「無いってば気持ちなんか。それに見たでしょさっきのヒドい放送。八千代さんがそう望んでも、世間は許してくれないよ」

詩葉、局に背を向け、立ち去る。

ヒロタスの声「イケるよ、この番組」

○芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

ヒロタス、スマホを池宮に見せる。

ヒロタス「トレンド一位だ」

『#2ボイス』がトレンド欄一位。関連ワード『上尾詩葉』『イチヤイチャ』

○詩葉のマンション・リビング（夜）

チェストに置かれたスマホに着信。
窓の向こうに都会の夜景。壁に飾られた詩葉の出演アニメのポスター。主にキッズアニメ『チュパット！』で、コウモリのチュパットが主役のもの。風呂上がりの詩葉、電話に出る。スマホに付けたチュパットのアクセ。

池宮の声（素のトーンで）「詩葉」

詩葉「なに？ 歩人。お説教？」

○池宮のアパート・ベランダ（夜）

池宮、風に吹かれ通話中。

詩葉の部屋より狭く、夜景は低い。

池宮「しねえよ。もう赤の他人だから」

○詩葉のマンション／池宮のアパート（夜）

以下、適宜カットバック。

詩葉「……ふーん。赤の他人からの電話怖いですけど、もう切っていい？」

池宮「ヒロタスのメッセ見たか？」

詩葉「切っていていいか、つつてんのに」

詩葉、ヒロタスのメッセージを開く。

『殺伐としながらどこか親密な空気。

二人の距離感が絶妙です。次回からは

もっとイチャイチャしてみましよう』

詩葉「ハツシユタグ、妙に盛り上がったた。

アレがイチャイチャに見えたんだね」

池宮「知らない人にはそう見えるかもな」

詩葉「：：三年前なら、本気でイチャイチャ

出来たのに」

池宮の声「そんな上手くいってなかっただろ

俺ら。もう忘れたわ」

詩葉（ムツとして）「ああ、そうですか」

池宮「俺のせいかな？ 前の恋人と番組やるの

そんなイヤか？ いいだろもう、三年も前

の恋人なんかどうだった」

詩葉「そういうとこだよ：：よくあんな平気

な顔して私と仕事できたね。みんなは私が

異常だと思ったろうけど、私からしたら」

池宮「いいよ、そういう話は。んで詩葉今、芝居の仕事いくつ続いでる？」

詩葉「ええ？ ねえ全然話噛み合わない」

池宮「会話したい訳じゃねえからな。これはビジネスだ。仕事上の情報交換」

詩葉、悔しげにアクセを弄び。

詩葉「（キャラ声で）チュパット！」

○TVアニメ『チュパット！』

少年サトル、ドラゴンの炎に追い詰められてピンチ。

サトル「ぐわあああ」

チュパット、宙を舞う。

チュパット「チュパット！」

サトル「助けてくれ、チュパット！」

チュパット、無力に旋回し、焦る。

チュパット「チュ、チュパット！」

サトル「チュパットー！」

詩葉の声「……だけ」

○ライブハウス・表

スウィーツ擬人化コンテンツ『トゥル
ー・スウィーツ・ボーイズ』のイベン
トポスター。美男子キャラが並ぶ。

池宮の声「俺も実質ひとつだけ」

詩葉の声「知ってるよ。『トゥルー・スウィー
ツ・ボーイズ』の、チョコレート・サンデ
ーくん」

○ライブハウス・ステージ

キャラ衣装の池宮、ファンの前で歌っ
て踊る。背後のスクリーンに、池宮が
演じる美少年キャラ、チョコレート・
サンデーのアニメPVが映っている。
池宮、PVと動きを同期させ、キャラ
声で台詞を甘く囁く。

池宮「俺の気持ちごとけてしまう前に、お前
の舌で味わって欲しい」

ファンの黄色い歓声。

池宮の声「ソシヤゲ、ギャラはいいからな。」

諦めきれないくらいには喰っていけない。
言われるまでもないだろうけど」

○池宮のアパート・ベランダ（夜）

詩葉の声「何それ当てつけ？」

池宮「詩葉だって嬉しそうだったじゃん。ナントカ娘受かった時」

○詩葉のマンション・リビング（夜）

詩葉「売れると思ったんだもん」

詩葉、並ぶポスターの、自分が演じた
美少女キャラを指でなぞる。

詩葉「『カフェ娘』『筋肉アイドル』『純情サキ

ユバス』全部サ終でユニット解散」

愛しそうにキャラの輪郭を撫で。

詩葉「似たようなのばかり」

池宮の声「俺は、その似たようなのの一つを
やっとなんか掴んだ。ここが踏ん張り時なん
だよ。ラジオだって次の何に繋がるか」

詩葉「……だったら、捨てた元カノの気持ち

なんて考えなくていいんだ？ 私はどうせ
遊びの女だったんだ」

池宮の声「んな話してねえよ。役者は望まれ
る内が花だ、わかってるだろ。頼む、俺と
ラジオでイチャイチャしてくれ」

詩葉「ねえ歩人：：三年前、どうして私をフ
ツたの？」

通話、切られる。

詩葉「：：」

○芸術放送・スタジオ・ブース内（本番中）

T 『第二回』

詩葉、池宮のトークを横目に見てる。

池宮「そんな訳で、この一週間すっかり話題
の的となった炎上女王です。如何でした？
上尾さん。いや、詩葉さん」

詩葉「何がです。別に？」

池宮、ヒロタスにアイコンタクト。

ヒロタス、手で西木戸に指示。

詩葉「？」

突如、池宮が甘く歌うチョコレート・サンデーのキャラソン（キャラクターソング）がBGMに流れ出す。池宮、途端に表情を変えて詩葉の方を向くと、役に入った甘い声で囁く。

池宮「そう。詩葉のこの一週間は、潤いが無かったんだね」

詩葉「は？ 何この空気」

池宮「それってつまり、俺っていう潤いを欲してくれてたって事？ ほら先週呼び捨てにしてくれたじゃん、歩人って」

詩葉「あれは呼び間違えただけだから」

池宮の顔が近付き、照れる詩葉。

詩葉「やめろ。来るな」

ヒロタス、ラジオ特有の放送作家の合の手。大きさに爆笑してみせ、笑い所を視聴者に伝える。

× × ×

T 『第三回』

詩葉と池宮、フリートーク中。再び突

如キキャラソンが流れ出すと、池宮が甘く囁いて詩葉に迫る。

池宮「そっかあ。詩葉はそんなことで悩んでたんだね。誰かに聞いて欲しかった？」

詩葉「またこれ？」

詩葉、池宮に迫られると腰が引ける。

池宮「いいんだよ、俺になら話してくれて。

なんでも聞くからさ。寂しいんだよな？

だからオンエアであんな酷い態度」

詩葉「この曲、チヨコレート・サンデーくんでしょ。いいの？ ファン怒るよ」

詩葉、嫌がりつつ照れてニヤける。

× × ×

T 『第六回』

詩葉と池宮、フリートーク中。

池宮「どうなんですか？ 詩葉さん」

詩葉「（素っ気なく）さあ。興味無いです」

突如キャラソンが流れ、池宮が詩葉に迫る。

詩葉「ああっ、またクソ曲が。止めろ」

池宮「やめて欲しい？ 本当に、やめてもいいの？」

迫る池宮に照れる詩葉。ヒロタスが笑い、副調整室で森崎達も笑っている。

○同・同・副調整室（本番後）

ヒロタス、スマホでSNSを確認。

『#2ボイス』の投稿。

『イチャイチャ営業』『クソ曲（笑）』

『照れる女王可愛い』等盛り上がる。

『推しのキャラソンにスポット当た

った。嫉妬どころか感謝でしてよ』『台

本見え見えだが、女王はガチ臭い』

ヒロタス「イチャラジは声優ラジオの定石だ

だけど、狙って作れる空気でもない。初回

の『歩人』呼びが効いてたね」

西木戸「あれ俺も思っちゃったもんな。こい

つら付き合ってるじゃねえのって」

八千代、バツの悪い顔。

○ 詩葉のマンション・寝室（夜）

詩葉、ベッドに倒れ込む。

詩葉「クソッ、照れるな私っ」

ニヤけた顔を枕で塞ぐ。

○ 『チュパット』収録スタジオ

詩葉、ほとんどコンテ画だけの動画に
合わせ、チュパットの声を収録。

詩葉（怪訝そうに）「チュパット？」

詩葉（哀しげに）「チュパットー」

詩葉（嬉しげに）「チュパット！」

詩葉の声「偶にはアフレコに作画間に合わないかな。こっちだって感情の込め方がさ」

○ カフェ

詩葉、八千代と昼食中。詩葉のテーブルには紅茶とサラダだけ。

八千代「そうね」

詩葉「…：チュパットって言うだけじゃん」

八千代「え？」

詩葉「って思ったでしょ」

八千代「訳ないじゃない、そんな奴この業界に一人もいないわよ。ねえ、あくまでプロレスだからね。昔付き合ってた事は内緒」

詩葉「急に何。そんなビビるくらいなら止めさせてよ、あんなノリ」

八千代「言ったでしょ。仕事選べる立場じゃない。それに、このネットラジオからどっちか外す事になったとしたら……」

詩葉「……私。そう、そうなんだ」

八千代「勘違いしないで。これは機会の平等の問題」

詩葉、黙ってサラダを食する。

八千代「あなたは色々経験あるでしょ、主演とかラジオとか。でも池宮は今初めて脚光浴びるかどうか、大事な時期なの」

詩葉「……知ってる」

○芸術放送・表（夜）

池宮歩人の声「池宮歩人と」

詩葉の声「上尾詩葉の」

池宮・詩葉の声「#2ボイス！」

○同・スタジオ・ブース内（夜）

T 『第八回』

曲が流れ、池宮が詩葉に甘く囁く。

池宮「今度俺と一緒に見る？ あの映画」

詩葉「もう、このクソ曲やめろって」

詩葉、池宮に迫られて一通り照れる。

我に返ると、ヒロタスを見て咳払い。

ヒロタス、それを合図に西木戸に指示。

詩葉の歌声でムードある曲が流れる

と、今度は詩葉が池宮に甘く囁く。

詩葉「そう。ふーん」

池宮、自身の口説きモードが解ける。

池宮「あれ？ なんだっけ、この曲」

詩葉「歩人は、私と映画見たいんだ」

池宮「あ。あれだ、『カフェ娘』の」

詩葉、上目遣いで池宮にすり寄る。

詩葉「映画見るだけで、いいの？」

今度は池宮の腰が引ける。

池宮「こっち来るなよ。真似すんなっ」

○SNS

『#2ボイス』の投稿。

『今日の流れクソ笑った』『こいつらマジで付き合ってた』『流石に恋人同士で番組はさせないんじゃ』『事実はどうでもいい そういう前提でメール送れメール職人』『俺らでこいつらくっ付けようぜ』

○芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

T 『第十回』

池宮がメールを読んでいる。

池宮「『歩人くん詩葉ちゃん、こんばん2ボイス（番組固有の挨拶）』」

詩葉「こんばん2ボイスー」

池宮「『いつもお二人のイチヤイチャトーク、楽しんで聴いてます』（甘く）だってさ、

詩葉」

詩葉「まだ曲かかってないだろ、やめろ」

池宮「『ところで、僕の彼女は職場の同僚なのですが、最近仕事上の価値観が決定的に噛み合わない事が判明しました』。ほお」

詩葉「ガチのお悩みじゃん」

池宮「『僕は、恋人としての自分と職場での自分。どちらを譲って生きていくべきか悩んでいます。妥協点は恐らくありません』」

詩葉「別れる別れろ」

池宮「『なので参考までに、恋人同士でいて職場でも共演されているお二人のご意見を伺いたいです』。ですって、上尾さん」

詩葉「だから、うちらが付き合ってる前提でメール送ってくるなしっ」

西木戸が詩葉のキャラソンを流し、詩葉、慌てて口説きモードに切り替え。

詩葉「そうね。私たちは役者だから、演じ分けなんか余裕よ。仕事とプライベート」

詩葉、池宮の膝に手を当て。

詩葉「そんな事で亀裂が入るような時期、もうとつくに乗り越えたもの。ね？ 歩人」

池宮、困って照れている芝居。

詩葉「：：なんだコイツ、全然照れてない」

池宮「いや照れてるって」

詩葉「どうした。もっと照れろー？」

詩葉、池宮に身を乗り出して迫る。

ヒロタスの合の手、爆笑。

池宮（笑って）「わかったわかった」

池宮、冷静に詩葉を押し戻す。

詩葉「（不満げ）なんだよー」

○居酒屋・外観（夜）

○同・内（夜）

詩葉、池宮、森崎、ヒロタス、西木戸で打ち上げ中。

詩葉「私たちがカップルみたいなのり。あれいつまで続くんですか」

池宮「今それがウケてるって話してんだよ」

森崎「やっぱり上尾さんは嫌？ 今日なんか

むしろノリノリに見えたけれどね」

詩葉「なんだか、カメラの向こうから私生活

まで透かして見られてるみたいで」

池宮「バカお前バカ、自意識過剰。リスナー

だって誰も本気にしてないって」

詩葉、池宮は無視して森崎に。

詩葉「その、あまり行き過ぎるのは……」

森崎「そう？ じゃ今のノリやめる？」

詩葉「え……？」

西木戸「いや、それはちょっと勿体ない」

森崎「僕は全然構わないけどね。演者さんが

イヤだと言えばやめる。また次にウケる企

画を考えるのが僕らの仕事」

池宮、席を立ち、詩葉の腕を引く。

詩葉「何よ」

池宮「ちよっと。いいから」

○同・表（夜）

池宮に連れ出される詩葉。

詩葉「これじゃ、むしろ私達何かありました
って言ってるようなもんじゃん」

池宮「イチャイチャ、続けさせてくれ」

池宮、真剣な眼差し。

池宮「お前とイチャイチャしたいんだ」

詩葉、池宮に背を向け、ニヤける。

池宮「仕事でな？」

詩葉「……（ボソツと）私にはドキドキして
くれない癖に」

池宮「俺、お陰で、声の仕事じゃないけど配
信のオフアーとか増えてんだ。詩葉は？」

詩葉「来てるよ」

池宮「なら」

詩葉「試しにゲーム実況？ 出てみたけど、
『普段は普通なんですな』だって」

池宮「それでも、今はそうやって顔と名前覚
えてもらうんだよ」

詩葉「声優が顔覚えてもらってどうすんの」
池宮「そっちが楽しみだって人も沢山いる」

詩葉「……それって声優のファンなのかな」

池宮「違うかも知れない。俺のファンだって俺じゃなくチョコレート・サンデーが生き続けてくれればそれでいいんだ」

詩葉「……そのファンの願いは否定しない。それは幸せなことよ、役者として」

池宮「それでも俺は……役じゃなくて、俺も脚光を浴びたいんだよ。頼む詩葉、俺とイチャイチャし続けてくれっ」

池宮、頭を下げる。

詩葉、その姿を見下ろしてほくそ笑む。

詩葉「どうしよっかなー」

池宮、顔を上げると、詩葉の耳元で甘く囁く。

池宮「頼む。なんだって言うこと聞くから」

詩葉、ゾクゾクっと身をよじり、池宮の頬にビンタ。

詩葉「調子に乗らないでくれる？」

詩葉、池宮に背を向け、火照った顔を手で仰ぐ。

○同・内（夜）

詩葉と池宮、戻って来る。

池宮「すいません、ちよっと連絡事項が」

森崎たち、笑みを浮かべている。

詩葉「何かあったんです？」

ヒロタス「番組、2クール目継続決定です」

詩葉（顔を顰め）「えー？」

池宮（同時に）「ありがとうございますっ」

詩葉と池宮、にらみ合う。

○同・表（夜）

一同、居酒屋を出て解散。

樋口の声「いたいた。歩人」

詩葉、振り返る。

樋口が池宮に駆け寄る姿が見える。

樋口の口伝てに池宮がガッツポーズ。

詩葉「？」

池宮と樋口、喜び合っている。

○アフレコスタジオ

オーディション参加中の詩葉、台本の台詞を熱演。終えて、不安げな顔。

詩葉「ありがとうございます」

ブースの外の制作者たちの姿を見る。難しい顔で何やら話している。

詩葉「？」

制作者たち、急に大爆笑し合う。

詩葉「（不安）……」

八千代の声「ごめんね。原作読んだら詩葉にピッタリだと思ったんだけど」

○声優事務所・オフィス

詩葉、八千代に見守られながらスケジュール表を眺める。「チュパット」と『#2ボイス』の収録のみ。

詩葉「いいよ。自分でもそう思ったし、いける気がしちゃってた。ただ私のお芝居が力不足で届かなかっただけ」

八千代「出来てたわよ、ちゃんと。あなたが売れてた頃より、今の方がうんと」

詩葉「……ありがとうございます」

八千代「きつとまだチャンスはあるわ。レッ
スン行きましよ」

詩葉「……けど。それっていつまで？」

八千代（行きかけ）「予約は4時まで」

詩葉「じゃなくて。私にはいつまでチャンス
があるの？ 事務所から戦力外通告される
のはいつ？」

八千代「……社長は、もう詩葉には十分チャ
ンスを与えたと思ってる」

詩葉「……歩人だって同い年なのに」

八千代「あなたの場合、長いキャリアが枷に
なってるのは否めない。でも今はまだ大丈
夫。チュパットの看板は大きいわ」

詩葉「……あんな役、誰だって」

八千代（へたな物まね）「チュパット！」

詩葉「！」

八千代（へたな物まね）「チュパット……」

詩葉「……」

八千代（へたな物まね）「チュパット？」

詩葉（笑って）「わかったから。やめて」

○詩葉のマンション・リビング（夜）

ソファに転がった詩葉、タブレットで動画を眺める。汗だくの池宮がユーチユーバーと辛口メニユーに挑戦中。共演者たちに笑われている。

詩葉「大事にしろよ、喉」

画面越しに、必死な池宮に触れる。

詩葉「……まだイチャイチャしてやるか」

○配信サイト

『#2ボイス』待機画面。

池宮の声「池宮歩人と」

詩葉の声「上尾詩葉の」

池宮・詩葉の声「#2ボイス！」

画面切り替わると、テンションの高い詩葉と、どこか覚めた池宮。

詩葉「皆さん一週間ぶりです。リピート放送見てくれた人はもっと早くかな。パーソナ

リテイーの声優、上尾詩葉と」

池宮「……そのノリ、何？」

詩葉「何がー？　これが普通の声優でしょ？

さあ今週も張り切ってやってみよう」

詩葉のキャラソン流れ、甘く囁く。

詩葉「ねえ歩人。そろそろ歩人こそ、私に会うのが恋しくなってきたんじゃない？」

池宮、鬱陶しそうに手であしらう。

○SNS

『#2ボイス』の投稿。

『女王テンションおかしい』『ラジオリ
慣れしたのかね。望んでるのはソレジ
ヤナイ感』『今日、歩人のがダレてたな』

○芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

配信終了後。

詩葉、SNSを池宮に見せる。

詩葉「だってさ。歩人ダレてたって」

池宮「えー、っーかさ」

詩葉「なに？」

池宮「上尾さんじゃドキドキしないし」

詩葉「……本気で言ってるの？」

詩葉、池宮の耳元に小声で囁く。

詩葉「歩人どうしちゃったの？ この間お願

いしてきた勢いはどこいったのよ」

ヒロタス、二人の距離感に気づかぬフリでそれとなく見守る。

池宮、素っ気なく、

池宮「何が。え本気でドキドキしたらヤバイでしょ。イチヤイチャって『体』^{てい}じゃん。人気商売ですよ？ うちら」

詩葉「……そらそうですけど」

○アフレコスタジオ

また異なるオーディション参加中の詩葉、台本の台詞を熱演。終えて、不安げにブースの外を見る。

スタッフ達、一言二言で会話を止め、一人がブース内に顔を出す。

スタッフA「以上になります。ご足労頂き本当にありがとうございます。結果は追って事務所の方にお知らせいたします」

詩葉（不安）「ありがとうございますでした」

○同・控え室

詩葉、帰り支度中。高校の制服姿の如月りりか（17）が飛び込んでくる。

りりか「おはようございます、如月りりかです。本日はよろしくお願いいたします」

スタッフ達、制服姿に沸く。

スタッフB「うわー、現役女子高生だ。どうしたの息切らして」

りりか「えへへ、学校終わってすぐ、ダッシュで来ました」

スタッフC「そんなムリしなくても待ったのに。如月さんには期待してるからね」

りりか「はい、ありがとうございます。がんばりますっ」

りりか、詩葉に気づく。

りりか「あっ、上尾さんお疲れ様ですっ」

詩葉「落ち着いてったら。ああもう」

詩葉、りりかのよれた制服を整える。

詩葉「はい、これで良し。リラックスして、

オーデイション頑張ってね」

りりか「はいっ、頑張りますっ」

りりか、スタッフの輪の中へ。

スタッフ、和気藹々とりりかを囲む。

詩葉、スタッフがりりかと楽しげに話

す様を眺め、足早に立ち去る。

○芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

T 『第十二回』

池宮のキャラソンが流れ、甘く囁く。

池宮「詩葉。いいんだよ、素直になって。

俺に会えなくて寂しかったんだろ？」

詩葉（ニコニコ笑って）「うん」

池宮「（素に戻り）うん、って」

詩葉「いやー、ラジオは最高だね」

池宮「台無しだから。それじゃ駄目でしょ」

詩葉「あ、そうか。じゃ、ヒロタスもう一回
歩人のクソ曲流して。私照れるわ」

ヒロタス爆笑。

○同・同・副調整室（夜）

詩葉、ブースから出てくる。

詩葉「お疲れ様でしたー。あの、本日はいかが
でしたでしょうか」

森崎「うーん……」

詩葉（不安げ）「……？」

森崎「まあ、いいんじゃない？ 上尾さんと

歩人くんの番組なんだから。何よりご自分
で楽しまれるのが一番ですよ」

詩葉「あ、ありがとうございます」

池宮「お疲れ様でしたー」

ブースを出る池宮、足早に廊下へ。

詩葉「何あれ。失礼な態度」

一同、詩葉をジトツと見る。

○詩葉のマンション・リビング（夜）

風呂上がりの詩葉、スマホで通話。

カメラ電話で池宮が出る。

池宮「なんだよ、こんな時間に」

詩葉「起きてたでしょ。遅くまでVチューバ

ーと配信ご苦労様、体が資本の声優さん」

池宮「バカにしてんのか？」

詩葉「厭味じゃないよ、面白かったし。毎晩

一人身は寂しいから、私、本当に癒やされ

ちゃった」

○ビル・オフィス（夜）

サラリーマン、声優番組を流し残業中。

詩葉の声「きつと視聴者が求めているものも、

こういう事なんだよね」

○走行中の電車（夜）

OL、つり革に捕まり、スマホで声優

番組を眺めている。

詩葉の声「私達が役者かどうかなんて関係な

い。友達みたいに、目の前で親しげに振る

舞ってくれる人と過ごす癒やしの時間」

○オタクの部屋（夜）

小汚いオタク、ポテチと缶チューハイで呑みながら、声優番組を眺める。

詩葉の声「それはそう悪い事じゃないのかもなあって」

○詩葉のマンション／池宮のアパート（夜）

適宜カットバック。

詩葉、ベランダから夜空を見上げ、スマホのカメラをかざす。

詩葉「思い出すなー。ね、歩人ん家のベランダでさ、一緒に月見してお酒飲んだよね」

池宮「覚えてねえ」

詩葉「覚えてない？ ホラ私が『カフェ娘』受かった時に」

池宮「…都合がいいんだよ、お前は」

詩葉「は？」

池宮「役者としてのこだわりはどこ言ったん

だよ。このラジオなんかノリ気じゃなかったんだろ？ 急にやる気出してよ」

詩葉「あの時はだって、歩人がなんでもなくて顔してるから」

池宮「ずっと、俺のこと見下してただろ」

詩葉「は？ 何いつの話」

池宮「お前は、役者として売れてるからって俺を見下してた」

詩葉「だから、いつの」

池宮「あの頃だよ」

詩葉「……違う。あの頃は、歩人が、仕事が無いことを自分の芝居のせいにして卑下してたから。そうじゃないよって」

池宮「事実そうだったからな。あの頃の俺がお前に勝ってるものは何もなかった。芝居も、それに歌に踊りだって」

詩葉「え、ありがとう？」

池宮「でも俺はもうあの頃の俺じゃねえ。まだ情報解禁前だけど、俺アニメの主演決まったから」

詩葉「ちよっ、バカ、それ本当に言っちゃ駄目なやつだから……いや、まあ。私だからいいみたいなところはあるけどね？」

池宮「すげえだろ」

詩葉「うん、おめでとう。凄いじゃん」

池宮「ああ。だからすげえだろ」

詩葉「うん。だから凄いよ」

池宮「だからすげえんだよ、素直に祝うんじゃない。やねえよもっと悔しがれよ」

詩葉「悔しいってば、言わなくてもわかるでしょ。同業者なら。でも同業者だから、その嬉しさもよくわかるよおめでとう」

詩葉、乱暴に言い切り、我に返る。

詩葉「……ああ。そういう事？」

池宮「自分より成功してる同業者と、一緒にいるってどういう気持ちかわかるか？」

詩葉「歩人……三年前、悔しかったの？ 私
という事が」

池宮「もう詩葉に見下されたりしない。だから対等な立場で言ってやる。あの頃は自分

に自信がなくて言えなかったこと」

詩葉「……なに？」

池宮「今のラジオに対するスタンスと同じだよ。お前は、寂しいから役者やってるだけだ」

詩葉「……」

池宮「世間と繋がるのが下手だから。認められる為に役者やって、寂しいから俺と付き合って、優越感に浸ってた」

詩葉「……だから私を捨てたの？」

池宮「俺を拾ってやった気でいたんだろ」

詩葉、反論が浮かばず。

池宮「お前、なんの為に芝居やってんだよ」

詩葉のスマホに八千代のメッセージ。

『お知らせがあります』

○池宮のアパート・リビング（夜）

狭い部屋。池宮、通話を切り、満足げに笑う。足下に転がるビール缶。

池宮「言ってやった、言ってやった」

遠く野良犬の遠吠え。

池宮、ハツとして夜の町を見やる。

ベランダに三年前の池宮と詩葉の姿。

発泡酒を片手に月を見上げ、仲睦まじげに寄り添っている。

池宮、カーテンを閉め幻影を消す。

○アフレコスタジオ

アフレコ用モニター。完成した作画でチュパットが生き活きと動いている。

詩葉「……すごい。声がなくても生きてる」

詩葉、我に返り山南（28）に照れる。

T 『山南 アニメ制作進行』

詩葉「ごめんなさい。当たり前前のことを」

山南「スタッフに伝えたら喜びますよ。みんな上尾詩葉のファンですから」

詩葉「またまたー」

山南「ずっと『チュパット』を引っ張ってくれて、本当にありがとうございました」

山南、頭を下げる。

山南「そして急な打ち切り、本当に申し訳ありません。玩具部門撤退を図るスポンサーを説得できなかった、我々の力不足です」

詩葉「そんな、頭を上げて下さい。私こそチユパットのお陰でここまで来れました……それでも」

山南（頭を上げ）「？」

詩葉「どこかで、この番組はずっと続いているのだと思います……そんな訳ないのに。寂しいですね」

二人、モニターのアニメを見る。

詩葉「みんな、凄い仕事してたんですね。私なんか恥ずかしくって」

山南「でも、最後にアニメに命を吹き込むのは上尾さん。あなた達の仕事ですから」

詩葉「……はい」

× × ×

詩葉、チユパットを熱演。

詩葉（怪訝そうに）「チユパット？」

詩葉（哀しげに）「チユパットー」

詩葉（嬉しげに）「チュパット！」

× × ×

山南、拍手してブースに入ってくる。

山南「最高のチュパット、頂きました」

詩葉「山南さん。あの、つかぬことをお訊きしてもよろしいですか？」

山南「はい。なんなりと」

詩葉「私：：今まで、ちゃんと周りのみんなの事見ながら、お仕事出来てましたかね」

山南「はい？」

詩葉、思いつめた表情。

八千代、ブースの外から見ている。

詩葉「私、独りよがりなお芝居、していませんでしたかね」

山南「：：上尾さん？」

詩葉、我に返り笑顔で取り繕う。

詩葉「なんて、今さら」

山南「：：上尾さん」

詩葉「あ、はい」

山南「あなたのチュパットは、僕らの誇りで

した。それにスタッフみんな、今はイチャイチャラジオの大ファンですから」

詩葉「えっ？」

山南「これからも楽しみにし続けますよ、上

尾さんのお仕事」

詩葉（照れて）「ええ……えっ？」

○カフェテラス

詩葉、八千代とランチ中。

八千代「そう、やっぱり。詩葉、本当に元カレに照れてたんだ」

詩葉「違う。照れてない、私を捨てたことが許せなかったの。どの面下げて一緒にラジオオしてんだろって思って」

八千代、笑う。

詩葉「笑わないですよ。私、歩人が初めてお付き合いした人だったんだもん」

八千代「……あなたが変なプライドこじらせてるの、きつと引退する理由作りたいんだろうなって思って、本気で正さなかった」

詩葉「私のことバカだと思ってた？」

八千代「世間知らずだとは思ってたかな」

詩葉「それ正解」

八千代「大人として向き合ってたのかしら。女性声優だ、うちの商品だ、って」

詩葉「お言葉を返すようですが、私だってスタッフ達の事、私の役に立てよって、道具のように見てたかも。ぶっちゃけ今も？」

八千代「本当に正直ね。私はいいと思うわ、詩葉のそういうところ」

詩葉「ありがと。さて、私の仕事はどうとう一つだけになっちゃった」

詩葉、腕をブンブン振り回し、

詩葉「するか、イチヤイチャ。プロとして仕事をまっとうするんだ」

○ズーム画面

詩葉、ヒロタス、森崎、西木戸、八千

代が参加して打ち合わせ中。

森崎「『#2ボイス』打ち切り決定しました。

次回、最終回です」

詩葉、呆然。

西木戸「本日別件あるとの事で、歩人くんには既に伝えてあるんですけども」

八千代「そんな、いきなり」

森崎「ほら、歩人くんの曲流して、毎回クソ曲クソ曲って煽ってたじゃない？」

ヒロタス「あれダメ？ だってファンの子たちもクソ曲クソ曲って楽しんでたよ」

森崎「あの曲の作曲家、今じゃレーベルのお偉いさんで。そこ声優アーティストも沢山抱えてるのよ」

ヒロタス（思い当たり）「あー」

森崎「僕ら所詮声優のバリューにしがみ付いてる身だから、どうにも逆らえなくてね」

詩葉「待ってください。じゃあ、私のせいじゃないですか。最初にクソ曲って言い出したの私で」

ヒロタス「違う違う。詩葉ちゃんに悪ノリ要求したのは俺だから。俺が悪かったよ」

森崎「こういうのはさ、誰のせいってこともないんじゃないかな」

一同「……」

西木戸「いや、普通にそのお偉いさんが悪くないですか？」

森崎「僕なんか沢山番組抱えてるからさ、終わるものは終わるといいうか、変にあげかない方がいいと思ってるんだけど」

森崎、お茶を飲んで一息。

森崎「時々夢見ちゃうよね。あれもこれも出れば続いて欲しかったなって。いつまでも、皆と顔を合わせていられたらなって」

詩葉「……ありがとうございます」

森崎「別に、上尾さんの話じゃないからね」

詩葉「いえ。度重なる失礼な態度も、本当にごめんなさい。私わかってなかった。皆さん、今まで本当にありがとう」

森崎「いやいやこちらこそだよ」

ヒロタス「どういたしまして」

西木戸「うわ、女王の乱心だ」

詩葉「コラ」

○芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

T『最終回 当日』

着席した詩葉、台本を読み込む。

ヒロタスも相席。

ヒロタス「僕ねえ、東日本大震災の時に上京したてで、知り合いもいなくて、本当に一人ぼっちだったんですよ」

詩葉、ヒロタスを見る。

ヒロタス「意外でしょう？ 今は調子よくやってみせているけどね」

詩葉「ごめんなさい。イメージ通りでした」

ヒロタス「あっそ。それでね……」

ヒロタス、詩葉を見て驚く。

詩葉、顔を覆って涙を伏せている。

詩葉「それは……どんなに不安だったでしょうね」

ヒロタス「（見守る）……」

詩葉「（気を持ち直し）ごめんなさい」

ヒロタス「ラジオだけが友達だった。DJは少し真面目になった後、結局いつも通り好きな曲かけて。隙あらば笑いを挟んで」

詩葉「……沢山いるでしょうね、今も。寂しい人たち」

ヒロタス「最終回だろうがやる事は変わらない。今夜、俺らはどこかで寂しく過ごしてる誰かの、最高の友達になる」

副調整室で樋口が森崎に平謝り。

詩葉（気づき）「？」

西木戸が飛び込んで来る。

西木戸「歩人くん消えた、連絡つかない」

ヒロタス、時計を確認。午後八時。

ヒロタス「あと二時間しか」

詩葉、立ち上がる。

詩葉「私、連れ戻してきます」

○同・同・副調整室（夜）

詩葉、ブースを出て廊下へ向かう。

ヒロタス、追ってブースを出る。

ヒロタス「いや待って詩葉ちゃん、歩人くんの家知ってるの？」

詩葉「あ。それなんですけど」

詩葉、一同に向き直り。

詩葉「私と歩人、昔付き合ってたので」

一同、固まる。

詩葉、廊下へ飛び出す。

○走行中のタクシー車内

詩葉、スマホに耳を傾ける。

樋口の声「ここだけの話にしてよ？ 歩人の

主演アニメ、ポシャってしまったんだ」

詩葉「……」

○池宮のアパート・外廊下（夜）

詩葉、池宮の部屋のドアを叩く。

詩葉「歩人、いるんでしょ。出てきて」

ドアの向こうから歩人の声。

池宮の声「近所迷惑だ。叩くな」

詩葉「ほら。歩人が大切にしているラジオの仕

事だよ。最終回だよ。私も……私も、甘え
じゃなくて、ちゃんとやるからさ」

池宮の声「ラジオなんかどうだっていい」

詩葉「……樋口さんから例の件聞いた。ある
よね。私も何度か似た経験あったよ」

池宮の声「俺は初めてだったんだよっ、ある
あるみたいと言っなっ」

詩葉「歩人……」

池宮の声「六年間走り続けて、今までかすり
もしなかった主役のチャンスをやっと……
やっとなんかと思ったら」

詩葉「……」

池宮の声「バラエティの真似事ばっか。それ
も全部大切な仕事だとか綺麗事だったよ。
俺はもう、あそこに引き返したくない」

詩葉「そんな。引き返してなんかないよ。キ
ャリアなんて、そうわかりやすくステージ
上がったたりしないって」

池宮の声「経験者は語るってか」

詩葉「ハッキリわかるのはっ、私が今ステー

ジを下がり続けてるって事だけっ」

詩葉、躊躇い、言い切る。

詩葉「経験者だからね、それはわかる。歩人はまだ、全然上がっても下がってもいないの。これからなの」

池宮の声「お前をフツてまで、前に進むって決めたのに」

夜空に月。

詩葉「……私のこと。嫌いになった訳じゃなかったの？」

池宮の声「好きだから、負けたくなかったんだ。詩葉と並び立ちたかった」

詩葉「……なのに、今では私から落ちて来ちゃったんだ。ごめんね」

池宮の声「謝らなくていい。詩葉は何も悪くない。お前はいい役者だよ。だからくだらない番組なんか出るな」

詩葉「さっきからずっと思ってた……素敵な声だね、歩人。私はね、最初に歩人の声が好きになったんだ」

○同・玄関（夜）

池宮「は？」

ドアの向こうから詩葉の声。

詩葉の声「私たちの綺麗な声なら、どんな綺麗な事も、どんな茶番も、現実に来るよ。楽しい事だっていくらでも巻き起こせる」

池宮「……何がしたいんだ」

詩葉の声「演技力勝負よ、歩人」

○同・外廊下（夜）

池宮、怪訝な表情でドアを開ける。

詩葉「今夜、ヒロタスが用意してくれた番組の主旨。私たちは昔付き合ってたって設定で、私が元サヤに戻ろうとするの」

池宮「はあ？」

詩葉「今日までの放送の話も、全部使う。歩人が私に落ちたら、私の勝ち。私が歩人を諦めたら、歩人の勝ち」

池宮「そのノリにはもう戻れねえから」

詩葉「逃げるな。役者だろ池宮歩人」

池宮がドアを閉めかけ、詩葉が防ぐ。

詩葉「（必死に踏ん張り）勝手に敗北宣言しないで、私と勝負してみせろ」

池宮「……」

池宮、手を離す。詩葉、ドアを大きく開く。うなだれる池宮。

詩葉、唇を池宮の耳元に近づける。今までになく、甘く囁く。

詩葉「弱虫」

池宮（目を見開き）「……」

○芸術放送・スタジオ・副調整室（夜）

時計が23時に近づく。

森崎、八千代、樋口が振り返る。

詩葉、池宮が入室する。

○同・同・ブース内（夜）

詩葉と池宮、席に着く。

ヒロタス、副調整室に振り返る。

森崎肯き、西木戸がキューを出す。

詩葉と池宮、真剣な表情で前を向く。

○配信サイト

池宮の声「池宮歩人とー」

詩葉の声「上尾詩葉のー」

池宮・詩葉の声「# 2 ボイス！」

ブースに並ぶ池宮と詩葉の姿。

池宮「皆さんこんばん2ボイス。池宮歩人で
す」

詩葉「こんばん2ボイスー、上尾詩葉です。
この恥ずかしい挨拶もやっと慣れてきたの
になー」

池宮「恥ずかしい言うな。えーそう言う訳で
ね：：本日、いよいよ最終回と言う事で」

池宮の曲が流れ、池宮口説きモード。

池宮「俺と詩葉の甘い時間も、今夜で最後だ
と思うと、名残り惜しいな」

詩葉「今日クソ曲早くない？」

池宮、詩葉の手を取る。

詩葉「きゃあっ、え、ウソ？」

池宮「ね？ 詩葉。俺たち、このままずっと
こうしていたかった」

詩葉、カメラに向け池宮の手を指し。
詩葉「ヤバイヤバイコイツ、女性声優の手に
触れてるって。これ一線越えてるでしょ」

池宮、詩葉の耳元で甘く囁く。

池宮「最後に、俺に言いたいことない？」

詩葉、指パツチンで合図。

詩葉の曲が流れ（池宮の曲フェイドア
ウト）、詩葉が口説きモード。

詩葉「歩人こそ」

詩葉、池宮の手を払い、逆に自分から
池宮に迫って顎クイ。

詩葉「最後に皆さんに伝えておくべき事ある
んじゃない？」

詩葉、カメラに向かって、
詩葉「この人ね。昔、私と付き合ってたんで
すよ」

池宮「（緊張）……」

ヒロタス「（様子見）……」

詩葉「初回放送、私態度悪かったでしょ。だって元カレと番組出来ますか？」

○SNS

『#2ボイス』が盛り上がる。
『やっぱり付き合ってた』『ヒロタスの台本だろ』『グレーだと思う』『どっちにしろ打ち切りしんどい』

○配信サイト

生放送で続く痴話げんか。
池宮のキャラソンが流れる。

詩葉「だからさ歩人。ぶっちゃけた話、寄り
を戻そうよ私たち」

池宮「ストリート過ぎんだろ、甘く囁けよ」
詩葉のキャラソンが流れる。

詩葉「いいじゃんどうだって。もう番組終わ
っちゃうし私たちも消えちゃうんだから、
業界的にさ」

池宮「勝手に消すな、一人で消えてろよ。俺

は消えたくない。まだまだ頑張って、絶対に生き残ってやる」

詩葉「わ、私だって生き残ってやるわ」

二人のキャラソンが同時に流れる。

池宮「でも俺とより戻して付き合う余裕があるってんだろ？ そんな覚悟じゃ生き残れないよ、落ち目の上尾詩葉さん」

詩葉（大げさに悔しがり）「きいーっ、っ、っ、っ、さっきからもう音楽うるさい、曲切ってる。どっちのクソ曲もっ」

音楽、止まる。

詩葉と池宮、顔を近づけ、睨み合う。

詩葉「いいじゃん、付き合いながら仕事も頑張ろうよ。むしろその方が頑張れるって」

池宮「……どうしてそこまで」

詩葉「好きだから。今も好きだから」

池宮「……」

詩葉「互いに応援し合うの。私達がプライドに囚われて出来なかった、簡単なこと」

○ オフィス（夜）

BGMに配信流していたサラリーマン、
作業中の手を止めて番組を見る。

○ 走行中の電車（夜）

今日は座れたOL、スマホで視聴中の
配信に見入る。

○ オタクの部屋（夜）

オタク、お菓子をつまむ手を止め、真
剣な顔で見入っている。

○ 芸術放送・スタジオ・ブース内（夜）

詩葉、配信の死角で池宮と手を繋ぐ。

詩葉「ここからまた成長するの。一緒に」

池宮（詩葉を見つめ）「……」

詩葉（見つめ返す）「……」

池宮、悪びた表情でカメラを見る。

○ 配信サイト

二人、真剣さ霧散させ、アドリブで茶
番を繋いでいく。

池宮「ムリだね」

詩葉「なんでさ」

池宮「俺は、俺より前に行く詩葉が好きだっ
たんだ」

詩葉「え。みんな聞いたー？ 私の事好きだ
ったんだってー、認めたよーっ」

池宮「でもなー。もう上尾詩葉さん、俺より
格下じゃないですかー」

詩葉（笑顔消え、睨み）「あ？」

池宮「うわ怖わっ、地雷だったみたい」

詩葉「言っておくけど、チョコレート・サン
デーくんが終わったら歩人も私と同じ、底
辺声優の仲間入りだから」

池宮「言ったなこの野郎。あと俺のチョコレ
ート・サンデーくんは永遠だから」

詩葉「チョコレート・サンデーくんってなん
だよ」

池宮「お前がくん付けしたんだろうが」

詩葉「なんか、バカみたい」

池宮「あー、言ったな」

詩葉「言いましたー。もう終わりだこんな番組っ」

池宮「だから終わるんだよ、最終回っ」

詩葉「ありがたいね。大体なんで私がこんな人に甘く囁かなきゃいけないの？ 懐かし
の『デュララジ』のパクリじゃんっ」

池宮「世代トークやめろババア」

詩葉「同い年だろ若作り野郎。ねえ、みんな聴いてー」

とカメラ向いて。

詩葉「私は最初から元恋人って裏設定もウンザリしてたんですよ」

池宮「お前っ、裏設定ってバラしちゃったら終わりだろ。もう終わりだけどっ」

詩葉「みんながそう望んでるかなと思って。言っておくけど私まだ処女ですから」

池宮「俺だってバキバキ童貞だわ」

詩葉「嘘つけチンポ乾くヒマもないだろ、モテモテの2・5次元声優さんがよー」

池宮「放送事故にしたいのかお前、番組終わるぞ」

詩葉「だから終わるんだってばっ、せーせーするっ」

池宮「こっちこそせーせーしたっ」

詩葉「最後だから言います。匂わせたのも全部演技。私、この人大嫌いだから」

池宮「残念、俺だって大嫌いでしたー」

詩葉「じゃ良かったじゃん、最終回で。ハッピースーエンドだね」

池宮「二度とその顔見ないで済むもんな」

詩葉「あ？ じゃ見せてやるよ」

池宮「あ？」

二人、ガンくれて顔を近づける。

詩葉・池宮「あーん？」

中継ブツ切りで番組終了。

○ビル・オフィス（夜）

PCに『2ボイス』配信終了の画面。
『配信は終了しました。番組の感想は
#2ボイスで呟こう』

サラリーマン「……」

サラリーマン、しばし呆然と画面を見
て――スマホに手をかける。

SNSに『#2ボイス』と打ち込む。

○芸術放送・スタジオ・副調整室（夜）

森崎、西木戸、八千代、樋口、ブリス
内を見て啞然。

○同・同・ブリス内（夜）

ヒロタス、目の前の光景に啞然。
詩葉と池宮、そのままキスしている。

○SNS

『#2ボイス』に添えられた呟き。
『草』

了